



石巻市雄勝町「雄勝地区震災慰霊公園」で、高齢の入院患者40人全員と、患者を救おうと病院内に留まった職員24人が津波の犠牲となった石巻市立雄勝病院の犠牲者慰霊碑に献花する仙台白百合学園中学校の中学生記者

今できること プロジェクト 震災伝承新聞

発行 河北新報社営業局 2024.2.11

中学生記者 被災地駆ける

- 塩釜二中 多賀城市 まち歩き ②
- 仙台白百合中 石巻市雄勝を訪ねて ③
- 南光台中 大学生と名取関上へ ④

東日本大震災の発生から13年。河北新報社の復興支援企画「今できることプロジェクト」では、次世代への伝承啓発のため、今年で4回目となる震災伝承新聞の制作に取り組みました。幼少期に発生した震災の記憶が定かではない中学生が被災地を訪れ、あの日から今に至る歩みを学び、発信する企画です。本特集は塩釜市立第二中学校、仙台白百合学園中学校、仙台南光台中学校の3校の生徒23人が記者として被災地取材に挑戦、それぞれの視点で記事化したレポートです。震災の記憶と教訓を、世代を超えて未来へ。学校や家庭、職場でこー読いただき、伝承のバトンをつないでいただければ幸いです。

記憶と教訓 次の世代へ



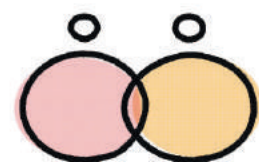
石巻市雄勝町の道の駅「硯上(けんじょう)の里」で語り部の佐藤美千代さんの話に耳を傾ける仙台白百合学園中学校のメンバー



尚絅学院大学ボランティアチームTASK Iのメンバーが指導する「防災ボトル」作りワークショップを体験する南光台中学校の生徒



多賀城高校災害科学科の生徒が歩道橋に設置した津波の波高を示す標識の説明を聞く塩釜第二中学校の中学生記者



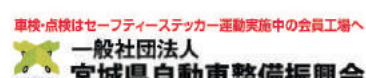
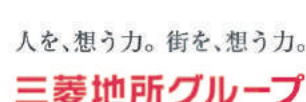
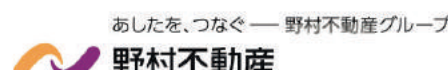
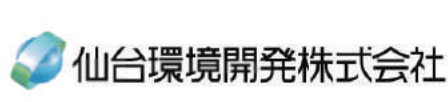
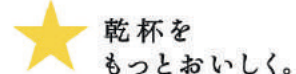
今できること
プロジェクト
2023-2024
再生と伝承

私たち賛同企業も、再生と伝承のために「今できること」をともに考え、このプロジェクトに賛同し推進していきます。

企画・制作
河北新報社
営業局(今できることプロジェクト事務局)



石巻市震災遺構
門脇小学校・大川小学校



◎後援／宮城県、福島県、仙台市、石巻市、塩竈市、多賀城市、名取市、大熊町、富岡町、宮城県市長会、宮城県町村会、宮城県教育委員会、仙台市教育委員会

(順不同)

今できることプロジェクトとは...

東日本大震災が発生した翌年2012年より、震災の伝承や防災啓発、風化の防止を目指して取り組んでいるプロジェクトです。毎年、河北新報社が読者と賛同企業とともに「何ができるか」を考えアクションしており、真の復興を果たすべく継続して取り組んでいます。

河北 今できること 検索

[お問い合わせ]今できることプロジェクト事務局
河北新報社営業部 tel 022-211-1318



塩釜市立第二中学校
塩釜市楓町2-10-1
生徒：333人

私たち塩釜市立第二中学校の1、2年生6人は昨年9月23日、都市型津波に襲われた多賀城内を取材しました。多賀城高校災害科学科1、2年生の8人に案内してもらいながら、市街地の浸水地域を視察。陸上自衛隊多賀城駐屯地では、当時の体験を隊員が振り返るビデオを見ました。予想外の出来事が起きたことによる緊迫感が映し出されていました。多賀城市役所では、再び大きな自然災害が発生したときに備えて講じている対策などについて、危機管理課の担当者の方に教えてもらいました。

駅前ビルに入る市図書館でまち歩き振り返りをしました。その際、災害科学科の方が言ったこんな言葉が忘れられません。「震災の記憶があるのは私たちの世代が最後だと思う。だからこそ『伝えなければいけない』という使命感があります」

中学1年である私たちはまだまだ覚えていません。でもまち歩きを通じて学んだことはあります。将来伝えなければならぬ立場になったとき、今回のことを思い出して、さらに多くのことを学んで精いっぱい伝えたいと思います。

見えぬ海から猛烈な津波

「1年鈴木緑、小笠原亜季」

「まち歩き」をしました。市街地沿岸部を襲った津波の実態を知るため、多賀城高校災害科学科1、2年生8人に案内してもらい、同科作成の多賀城津波伝承マップを手に、海に程近いイオン多賀城店からJR多賀城駅まで約1・4キロの「まち歩き」をしました。イオン店舗内の1階天井近くの床から3階の位置に、津波が来たことを示す印が付けられていました。階段で4階の屋内駐車場に上って外を見ると、工場や倉庫に遮られて海は見えませんが、近くに見えるフェリーが「海はすぐそこ」と

教えてくれます。タレット端末で津波の映像を見てももらいました。津波はビルとビルの間を通る道路を縦横無尽に猛烈な勢いで車を巻き込みながら押し寄せていました。このような津波は「都市型津波」と呼ばれます。

都市型津波 ビルなど林立する市街地。津波が押し寄せた瞬間、予想外の方向から押し寄せた津波。

跡を残すため、泥の上にアクリル塗装をして保護し、保存しているそうです。その後は住宅地を移動し、なごり、各所に残る津波の痕跡や高さを示す標識を確認。東日本大震災の津波と平安時代の869年にあった巨大津波である貞観津波も越えなかったとされる「末の松山」を見学しました。

駅前ビルに入る市図書館でまち歩き振り返りをしました。その際、災害科学科の方が言ったこんな言葉が忘れられません。「震災の記憶があるのは私たちの世代が最後だと思う。だからこそ『伝えなければいけない』という使命感があります」

都市型津波 後世に伝承

多賀城市、ネット上に「見聞録」

【2年和地舞佳、高橋凜】「震災当時、どうすればいいか迷った点がたくさんありました。多賀城市中心部の住宅地に位置する八幡上1丁内会の前会長渡辺武さん(80)はこう振り返ります。市内を西から東に流れる砂押川を挟み、同町内会を含む南側は低地で犠牲者が出るなど津波被害が大きくなり、北側は高地のため被害が少なかったそうです。渡辺さんの自宅は1階部分が冷蔵庫の高さまで浸水しました。」

砂押川南側は国道45号や県道仙台南線産業道路といった幹線道路が通っており、多くの車両が行き交います。多賀城市危機管理課によると、工場や港湾施設が多く立ち並んでいるので海沿いの状況を確認しにくそうです。市内で犠牲になったのは188人で、ほぼ半数に当たる91人は市外在住の方でした。

同課主幹の米山美人さんは「海が見えないので、犠牲者の中には多賀城に海に近いことを知らない人がいたかもしれません」と推測します。都市型津波に襲われた多賀城市では被災体験を市内外に積極的に発信して風化させないよう、震災の記録を収集・保管し、体系的に整理したデジタルデータベース「たがじょう見聞録」を作成。インターネット上で公開しています。東北大学災害科学研究所の協力を得て都市型津波のメカニズムを解説した上で、市の一減災都市1に向けた取り組みや、小中学校で実施している防災教育などを紹介しています。

ハード面では災害時の避難路や物資運搬のため市内を南北に走る幹線道路を整備しました。防災拠点として「さんみらい多賀城イベントプラザ(STEP)」も建設。通常時はスポーツや市民交流の場として活用し、災害時は支援物資の管理拠点や帰宅困難者の一時の受け入れ場所になる計画です。

記憶のたすき受け継ぐ

多賀城の浸水市街地を「まち歩き」



多賀城高校災害科学科が設置した津波浸水高表示についての説明を聞く塩釜二中の生徒。国道45号線に架かる歩道橋の下に設置された津波浸水高表示を見学した。



【2年和地舞佳、高橋凜】「震災当時、どうすればいいか迷った点がたくさんありました。多賀城市中心部の住宅地に位置する八幡上1丁内会の前会長渡辺武さん(80)はこう振り返ります。市内を西から東に流れる砂押川を挟み、同町内会を含む南側は低地で犠牲者が出るなど津波被害が大きくなり、北側は高地のため被害が少なかったそうです。渡辺さんの自宅は1階部分が冷蔵庫の高さまで浸水しました。」

砂押川南側は国道45号や県道仙台南線産業道路といった幹線道路が通っており、多くの車両が行き交います。多賀城市危機管理課によると、工場や港湾施設が多く立ち並んでいるので海沿いの状況を確認しにくそうです。市内で犠牲になったのは188人で、ほぼ半数に当たる91人は市外在住の方でした。

同課主幹の米山美人さんは「海が見えないので、犠牲者の中には多賀城に海に近いことを知らない人がいたかもしれません」と推測します。都市型津波に襲われた多賀城市では被災体験を市内外に積極的に発信して風化させないよう、震災の記録を収集・保管し、体系的に整理したデジタルデータベース「たがじょう見聞録」を作成。インターネット上で公開しています。東北大学災害科学研究所の協力を得て都市型津波のメカニズムを解説した上で、市の一減災都市1に向けた取り組みや、小中学校で実施している防災教育などを紹介しています。

ハード面では災害時の避難路や物資運搬のため市内を南北に走る幹線道路を整備しました。防災拠点として「さんみらい多賀城イベントプラザ(STEP)」も建設。通常時はスポーツや市民交流の場として活用し、災害時は支援物資の管理拠点や帰宅困難者の一時の受け入れ場所になる計画です。

陸自隊員 救助に尽力

【2年山本健正、1年細谷陽樹】

多賀城市にある陸上自衛隊多賀城駐屯地では、大きな津波被害を受けた。駐屯地は海から約1キロ離れたため、津波の襲来は想定外。隊員らは驚いたそうです。

自衛隊の災害派遣任務は初動対応に限定されており、阪神大震災(1995年)は12日、岩手・宮城内陸地震(2008年)は9日活動を終えました。東日本大震災では多賀城駐屯地に所属する陸自第22普通科連隊が、14日間におたり災害派遣活動に当たりました。対応期間は桁違いで、被害の大きさを改めて実感しました。

「震災を受けて、多賀城駐屯地は不定期で呼集訓練を実施。大地震の際は車両を高台に移動させるという基本動作を取り入れるなど、さまざまな対応を積み上げています」と駐屯地の広報担当者は説明してくれました。「自衛隊の主任務は国防ですが、災害救助や遺体収容など私たちしかできない任務もあります」と口元を引き締めます。

米山さんは「東日本大震災を経験して学んだことを伝えることが大切。備えをステップアップさせた」と話していました。



壮絶な緊迫感 ビデオに 多賀城駐屯地 活動144日

駐屯地ではテレビ局の協力で作成したビデオ(約28分)を見せてもらいました。ビデオには広報担当の隊員が撮った当時の映像が記録されていました。震災後、出動に備えて駐屯地所属の約1500人が集結しました。グラウンドには派遣車両が待機。

当初は救助活動でしたが、時間を経ると見つかるのは遺体ばかりに。小さい子どもの遺体を見つけたと

多賀城市の被災状況について市危機管理課の米山さん(右)と八幡上二町内会会長の渡辺さんが説明した。

「いざ」を考え生活する 山本 健正 2年

多賀城駐屯地を訪ねたとき、冒頭で隊員の方が私たちに何度も繰り返した「後世に語り継いでほしい」という言葉の意味がよく分かりませんでした。しかしビデオを見た後、震災の過酷さや、被災した人々が未来を信じてその状況を乗り越えてきたことが伝わりました。

養殖ホタテの名声回復

石巻・雄勝の漁師 佐藤さんブランド化に自信



仙台白百合学園中学校
仙台市泉区紫山1-2-1
生徒：144人

私たち仙台白百合学園中学校の3年生5人と2年生2人は、昨年9月30日に石巻市雄勝町を訪ねました。被災された人たちの当時の様子や復興に取り組む人々取材しました。ホタテ漁では、震災後も「量より質」を大切にしているホタテを育てる漁師さんの思いに感銘を受けました。雄勝町の名産品である「雄勝石」の加工品を作る工房では、津波の被害を受けた、諦めずに働き続ける姿に胸を打たれました。震災時、多くの人が津波によって亡くなった雄勝病院について学び、命の重みと津波の恐ろしさを深く感じました。

「量より質」試行錯誤の日々

【3年長谷川真悠子、佐藤心音】

雄勝のホタテ生産量は、震災前年の水揚げ高が2613トンと宮城県内一。佐藤さんは、震災後の雄勝の漁師は「量より質」を第一に、ブランド化を図ってホタテ養殖を行っている、胸を張ります。

ホタテの稚貝は160個を上限とし、栄養が行き渡るよう、ロープの間隔も60センチで統一。試行錯誤を重ねて最も良い結果が得られたこのルールを導入して、いままで伸びています。

水産業は壊滅的な被害を受けました。漁船378隻のうち355隻が被災し、1577の養殖施設全てが流失。被害総額は24億円を上回りました。

佐藤さんは「手足のよう」に使っていた船が足りず歯がゆい思いを返ります。当初は震災前の8割ほどの種を北海道から購入し、養殖を再開。「翌年は順調に作業が進み、新たな船が加わった3年目からは漁が再開し、笑顔を見せました。

雄勝の人口は震災前の4分の1になり、過疎と高齢化が進みました。漁協の組合員数も震災前の323人から180人にまで減少。漁業を生業とする家でも漁師を継ぐ子も少なくなくなっています。

佐藤 心音 3年
このプロジェクトを通して、3月11日の出来事を今起きたことのように感じました。記憶を思い起こして話すことは、雄勝の皆さんが私たちに伝えてくれたように、今度は私たちが後に続く人に伝えることが大切だと思います。

記憶の伝承 私たちの番

横江日向子 3年



雄勝病院のことが最も印象に残っています。雄勝病院で犠牲となった職員の方は患者さんを助けるために最後まで諦めなかったと聞きました。自分の命を優先するべきだったのか、どうすれば良かったのかは誰も分からないですが、犠牲

今回の経験 私も伝える

佐藤 ちひろ 3年



震災当時私は7歳でした。プロジェクトに参加する前は、授業で教わる程度の知識しかありませんでした。当時の記憶が鮮明にないため、今は今回得られたものを周りの人に伝え、震災を風化させないようにしていきたいです。

現地を訪問 理解深まる

伊藤 栞乃 3年



今回の取材で、雄勝病院を襲った津波から患者さんを守ろうとした犠牲となった人々が、現場でしか味わえないことがあると実感するとともに、家族や友達と共に送る日常生活にありがたみを感じました。

語り部の思い 心に迫る

佐藤 栞乃 2年



雄勝で取材した人々から震災当時の話を聞き、町を一つ変えた災害を語り継いでいく強い意思を感じました。離れ離れになった家族を思いながら強い意志で命の危機を乗り越えた語り部の

震災伝承へ行動起こす

平嶋 千乃 2年



石巻市雄勝町は東日本大震災で津波に襲われ、雄勝町を生産していた10の工房が全て流され、職人は震災前の3分の2に減りました。そんな状況でも諦めずに復興に向けて努力した地元の方々、そしてボランティアの力があつて今も雄



「2年佐々木彩芭、平嶋千乃」
石巻市雄勝町の伝統工芸品といえば、特産の黒色硬質粘土板岩を加工した雄勝硯が有名です。今回取材した雄勝硯生産販売協同組合の徳水辰博さん(33)は「雄勝石の持つ魅力を広く伝え、伝統工芸を守っていく」と話しました。

東日本大震災で大津波に襲われた雄勝硯の工房では、加工用の機械類が流失し、建物も流されてしまいました。どんなに雄勝の人々は諦めませんでした。震災の翌年に復元されたJR東京駅の屋根がその象徴です。1914(大正3)年の創建当初と同じ雄勝産の黒色粘土板岩のプレート板を使用。がれきの中から加



「質優劣化しにくい雄勝石は、加工のしやすさだけでなく、保温性と保水性にも優れています」と徳水さんが教えてくださいました。雄勝石のプレートプレート(石皿)は、売り上げのトップを占めています。組合は、家庭で使われる食器類の充実を図るため、東北工業大学と連携し、アドバイスを得ています。

雄勝硯の復興を目指す人たちの姿に触れ、どんな困難があってもくじけずに立ち向かうことの大切さを知りました。伝統工芸に関心が持たれ、行動を起こすことが復興を後押しする第一歩だと学びました。

「悲劇繰り返さないで」

【3年横江日向子、佐藤ちひろ、伊藤栞乃】

石巻市雄勝町の地域医療を担った市立雄勝病院は、もうありません。海の見える病院から見た美しい景色は、高さ10メートルの防潮堤で覆われています。かつてにぎわった街とは見違えるほど静かです。

東日本大震災があったあの日、3階建ての病棟をはるかにしのぐ16メートルの大津波はあつという間に建物をのみ込み、職員24人、入院患者ら40人の計64人が犠牲になりました。

祖母の薬を受け取るため、地震発生時に病院に来ていた

阿部久良さん(50)は「病院の入り口付近に20人ぐらいたった。最初はラジオで6階の大津波警報と聞き、高さ10メートルに逃げれば何とかなるだろうと話していた」と証言します。

犠牲となった鈴木孝壽副院長の長女高橋裕美さん(36)は、病院の目の前に海があつたため、医師や看護師さんは津波への備えを常に意識していたと振り返ります。

たまた、津波発生時のマニュアルの指針は、過去の宮城県沖地震やチリ地震での津波の高さだったとあって、今回の

大津波には対応できませんでした。ほとんどが寝たきりだった入院患者の病室は病棟3階にありました。数少ない病院職員生存者の証言では、鈴木副院長が職員たちに患者を屋上へ運ぶよう指示。4人がかりでシツツに寄せ、屋上に運びました。

日本には、海の近くに病院や高齢者施設が数多く存在します。「緊急時に生死を分ける判断をできるだけ現場の人たちにさせないような環境づくりを、これから国でやってほしいと心から思います」と

鈴木副院長の妻裕子さん(66)は「医療現場の悲劇を繰り返さないよう、患者だけでなく、医療施設の職員のためにも津波対策を早急に考えてほしい」と、犠牲になった病院職員や残された家族の思いを代弁するように話しました。

震災後、国や県は医療施設の台高や内陸への移設を進めました。海沿いにある病院については、災害時に救命救命を担う拠点病院となる大規模な総合病院に事業継承計画(BCP)策定を義務付けました。それ以外の医療施設には、同計画の策定を進めるよう指示が出されています。

雄勝病院の職員の行動が私たちに投げかける重い問いかけへの答えは簡単には導き出せず、自問自答を繰り返しています。

津波で64人犠牲 雄勝病院 遺族、対策強化を訴え

雄勝病院の遺族は、津波の被害を受けた雄勝町の復興を訴え、対策強化を訴えています。

雄勝町の復興を訴え、対策強化を訴えています。

雄勝町の復興を訴え、対策強化を訴えています。

雄勝町の復興を訴え、対策強化を訴えています。

雄勝町の復興を訴え、対策強化を訴えています。

雄勝町の復興を訴え、対策強化を訴えています。

雄勝町の復興を訴え、対策強化を訴えています。

雄勝町の復興を訴え、対策強化を訴えています。

雄勝町の復興を訴え、対策強化を訴えています。

雄勝町の復興を訴え、対策強化を訴えています。

雄勝町の復興を訴え、対策強化を訴えています。

震災の悲劇と教訓伝える

750人が犠牲の名取・関上



「1年五日月颯真、植松愛奈、湯目壮介」
関上の北を流れる名取川沿いの旧市街地に盛り土をした高台に新たな街区が築かれた。復興住宅近くに2019年オープンした商店街「かわまち」す関上」で若菜寿司を営む比佐幸悦さん(66)は、18歳からお寿司を握る職人さんです。

名取・関上の寿司店主 比佐さん

活気あるまちへ意欲

でした。津波ですべてを失った比佐さんは「お客さんにおいしいお寿司を食べてもらって喜んでほしい」と1年後に仮設商店街で営業を再開。現在の店に移って4年になります。お店の再興にはお金もかかりました。比佐さんは80歳まで働く覚悟をしたといいます。比佐さんは漁船が出港する関上の朝の風景に愛着があるそうです。一方でも意見も言ってくれた地元の人たちがほとんどいなくなりました。たかさんの人に繰り返し訪れてもらい、活気のあるまちになってほしい」と笑顔で話してくれました。

「お客さんのため」店再興



日和山(写真奥)に隣接する名取市震災メモリアル公園に立つ慰霊碑は、関上を襲った津波と同じ高さの8.4m(左)震災後、公園内に移設された昭和三陸津波の「地震があったら津波の用心」の教訓を刻んだ石碑(右)

「1年神尾ひかる、上川名翔大、神一護、武田愛莉」
尚綱学院大学(名取市)の学生ボランティアチーム「TASKI」は、震災直後から関上地区での被災者支援や伝承活動に取り組んでいます。大事にしていることは、3つの「つ」。人と人をつなぐ、関上のありのままを「つたえる」、被災地への定期的な活動や支援を「つづける」です。仮設住宅があった頃は体操や食事会などのイベントを開いたり、住宅再建が進んで町内会全体の活動が始まってからは交流会のお手伝いをしたりと、復旧復興の段階に合わせた活動を積み重ねてきました。

「学生が記憶つなぐ」尚綱学院大生ら伝承活動

関上の日和山には「地震があったら津波の用心」という石碑があります。昭和三陸地震の8カ月後に建てられた津波は来ず、33年の昭和三陸地震では津波が達しなかった。この教訓が伝えられていたことが知られていました。長沼さんは「私も関上は安全だ」と思っていました。しかし、親の世代、祖父の世代に経験したことが伝わっていません。長沼さんは「親の世代、祖父の世代に経験したことが伝わっていません」と強調しました。

南光台新聞

仙台市立南光台中学校

仙台市泉区南光台
7-24-1
生徒：306人

私たち仙台市立南光台中学校の1年生10人は10月14日(名取市関上(ゆりあげ)で東日本大震災について取材しました。関上中央町内会長の長沼俊幸さんには、かつてのまちがあった場所での当時の様子を聞き、過去の災害の経験が伝えられていなかったことを知りました。新市街地で店を再開した若菜寿司店主の比佐幸悦さんの話からは、地域の再生について考えました。尚綱学院大学ボランティアチームTASKI(たすき)の皆さんとのワークショップでは、防災ポトルづくりを通じ、「備え」の大切さについて学びました。

震災後、関上の人々は陸の公共施設などへ避難し、その後仮設住宅に移りました。長沼さん家族4人は震災の2カ月後に避難所を出て、台所と風呂トイレを除く居住空間が3畳2間しかない仮設住宅に6年半も生活しました。仮設住宅は新しい建物なのに、隣で生活する人の声や、トイレを流す音もそのままだけで生活する音が聞こえてきたそうです。長沼さんは「寒く、狭く、大変でした。なかなか実感を持っていないですが、災害が起きたら自分はどうなるかを想像して、自分の問題として考えてください」と話しました。



聞いて！ 知って！ 同世代へのメッセージ

驚くばかり貴重な時間

五日市 颯真 1年

関上を見渡せる小さな丘、日和山の頂上よりも2メートル高い津波が来たこと。寒く、狭く、隣の家の音も聞こえてしまいう3畳2間の仮設住宅に一家4人で暮らした大変さ。店が流されても再起し、お客さんを楽しませようと工夫するすごさ。驚くことばかりの、貴重な時間でした。

震災ようやく自分ごと

植松 愛奈 1年

今までは、震災のことについて、その重要さがよくわかっていませんでした。でも、被災された方から直接お話を聞くことで、自分ごととして考えることができました。同年代、下の世代、東日本大震災を経験していない人にも伝えていく。今回のプロジェクトは、その一歩になります。

次世代伝承こそが使命

大内 健太郎 1年

今回の震災学習で「この学年だからできることがあるのではないか」と考えました。覚えているものを伝えていきたいと思います。でも、皆さんのお話を聞いて、次の世代に教訓を伝えていくことはできます。それが、東日本大震災の起きた年度に生まれた私たちの果たすべき使命だと思います。

伝える大切さを学んだ

神尾 ひかる 1年

震災のことは知っているつもりでした。でも、実際に被災地を見てお話を聞くと、一体どれだけの人がつらい思いをしたのだろうか、たくさんの人、家、物、場所を瞬時に消し去った津波はどれだけ怖く、悲しい出来事だったかと、知らないことばかりでした。伝える大切さを学びました。

「復興」に終わりは無い

上川名 翔大 1年

「復興」という言葉に対する考え方が変わりました。新しいまちができ、生活は震災前よりも便利になったそうです。しかし、震災前に眺めていた景色や、地域でのご近所づきあいは元通りにはなりません。住民の方々の心の中では、震災は終わりのないものだと感じました。

津波の被害 本心に怖い

神 一護 1年

TASKIの方から津波に遭った話を聞きました。逃げ遅れ、屋根上に避難したところ、すぐ近くの電柱につかまって助けを求めている同級生がいて、助けたいけど自分も危ない状況なので行けず、その人は結局亡くなったそうです。年齢の近い方の話は、本当に恐ろしいと思いました。

人を思う優しさに感動

武田 愛莉 1年

印象に残ったのは「復興に終わりは無い」という話です。一見すると普通の生活に戻っていても、心が立ち直れるとは限りません。もう一つは「仕事のやりがいはお客さまの笑顔」と言っていた比佐さん。自分も店がなくなり悲しいのに人のことを優先できるのはすごいと思いました。

復興の基準 人それぞれ

武山 莉桜 1年

「たくさんの人に聞かれたけれど、復興とはどういうことかわからない」という長沼さんの言葉を辞書で引くと「再び盛んにすること、盛んになること」とあります。盛んになったと感じる基準は人それぞれであいいで、復興に終わりは無いのだと感じました。

語り継ぐ意味考えたい

守屋 結衣 1年

江戸時代から続く関上のまちを瞬時に奪った津波の残酷さ、復興について考える難しさを実感しました。私たちに震災の記憶はありませんが、被災された方のお話を聞き、思いを知りました。この新聞から、なぜ震災を語り継ぐのか、風化させてはいけないのかを伝えたいと思っています。

繰り返さない努力大切

湯目 壮介 1年

つらく悲しい記憶なのに、取材した皆さんは一生懸命に教えてくれました。自分には地震や津波の記憶はありませんが、想像することはできます。こんな思いを繰り返さないようにするには、わからないことをそのままにするのではなく、わかろうとしないといけないと思いました。

聞いて！ 知って！ 同世代へのメッセージ